

育成すべき21世紀型“スキル&倫理観”

〈福山市めざす子ども像〉

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子ども		
〈中学校区めざす子ども像〉		
主体的に課題を発見し、協働して解決することができる子ども		
〈学校教育目標〉		
志をもち、社会で活躍できる児童の育成		
〈児童生徒の実態〉	〈課題〉	〈地域の実態・保護者の願い〉
○基本的な学力は概ね定着し与えられた課題に対しては、真面目に取り組む児童が多い。 ●自ら考えまなぼうとする力や意欲が、不十分である。 ●勉強が好きと答える児童が少なく、学習に対する意欲が低い。 ●固定化した人間関係の中で、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が不十分。	●自ら考え学ぼうとする力や意欲が、不十分である。 ●勉強が好きと答える児童が少なく、学習に対する意欲が低い。 ●基礎的・基本的な学習内容をもとにした論理的思考力、表現力、活用力が不十分である。 ●固定化した人間関係の中で、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度が不十分であり、生きる力となる社会性に課題が見られる。	○学区内は田畑も多く残り、四季が豊かな里山に囲まれた地域である。伝統文化「はね踊り」横倉地区「平家谷伝説」等、次代へ伝えていきたい歴史がある。 ○地域に学び地域の良さを実感するとともに、地域を生かし、自然を守り、ふるさと「山南」に貢献できる人間性豊かで、たくましい、山南っ子の育成を願い、地域は学校教育活動に大変協力的である。
〈重点課題〉	学校評価自己評価表	アクションプラン
◎自ら考え学ぼうとする学習意欲 ◎基礎的・基本的な学習内容の定着 ◎コミュニケーション力等、生きる力となる「社会性」		

① 〈育成すべき21世紀型“スキル&倫理観”〉

「主体的に問いを立てて、他者と協働しながら解決していく力」			
1 自分から進んで取り組む力 (主体性)	2 友達と協力する力 (協働性)		
3 自分らしく表現する力 (創造性)	4 みんなのことを考えみんなのために働く力 (社会貢献力)		

② 〈育成すべき21世紀型“スキル&倫理観”を身に付けた児童生徒の姿〉

1・2学年	3・4学年	5・6学年
教師の一斉指導のもと、自力解決や協働解決ができる 自己の考えを表現できる	教師の一斉指導に導かれて、多様な主体的・協働的な活動ができる 自己の考えを検証できる	部分的な教師の一斉指導のもとで、自己決定を含む主体的・協働的な活動ができる。 自己の考えを発展できる

1 自分から進んで取り組む力 (主体性)	①目標 自分にとってふさわしい目標やめあてを決めて学習できる。	②積極性 グループやクラスでの話し合いの時に自分の考えや意見を積極的に出せる。	③実行 グループや自分で決めた計画にそって、進んで調べたり作ったり発表できる。
2 友達と協力する力 (協働性)	④対話 自分の意見やアイデアを友達に納得してもらえるように説明し合える。	⑤協力 グループワークの時に、友達と協力して課題やめあてに取り組める。	⑥練り上げ 友達の良いところやアドバイスを生かし合って、より良い考えや作品を作れる。
3 自分らしく表現する力 (創造性)	⑦発想 新しいアイデアや工夫はないかと、いつも自分で考えられる。	⑧個性 自分らしい考えを生かして文章を書いたり発表したりできる。	⑨質問 「なぜだろう?」「どうしてかな?」といった質問を考えられる。
4 みんなのことを考えみんなのために働く力 (社会貢献力)	⑩思いやり 相手の気持ちを考えながら、互いの存在や立場を尊重しようとする。	⑪公共心 公共の利益のことを考えようとする。	⑫自己有用感 人や社会の役に立てたことへの喜びや達成感を感じている

③ 〈取組の重点〉

○単元指導計画をもとに、授業においてつきたい力を明確にし、児童一人一人の完全習得をめざす取組。
○導入の工夫や問題解決に必然性をもたせ、学び合う学習活動の充実により、学習意欲の向上をめざす取組。
○「基礎スキル」の4領域(読む、書く、聞く、話す)と「問題解決スキル」の3領域(見通す、調べる、評価する)の計7領域の学習スキルを育てる取組。
○授業構成「学習課題の設定→解決の見通し→自力解決→協働解決→一斉検証→まとめと振り返り」の定着。

育成すべき21世紀型“スキル&倫理観”

「自己有用感」とは

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等の語とは異なります。

自分に対する他者からの評価が中心

最終的には自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントです。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい」という形の自信です。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっている、とさえ言えます。

「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながるであろうことは、容易に想像できます。しかしながら、「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しません。あえて、「自己有用感」という語にこだわるのは、そのためです。

平成13～15年度文部科学省委嘱研究「児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発」の研究グループは、その当時の子供たちの一番の問題を「社会性の基礎となる部分」、すなわち「人と関わりたい」という意欲そのものが低下しているところにあると考えました。そのことが人間関係の希薄化を生んだり、他人を平気で傷つけたり、ルールを守らなかったり、集団への参加を妨げたり、といった現象になっていくのではないかと、という仮説を立てたのです。

その仮説の下で調査研究を行った結果、報告書の中で効果的な解決策として提言されたのが、「異年齢の交流活動の推進」によって「自己有用感」を育むことでした。その知見は、現行の小中学校の学習指導要領にも「異年齢集団による交流」の重要性として盛り込まれています。

★社会性の基礎となるもの

「人（他の子供）とかかわりたい」と思う気持ちは、自らの体験によってのみ、獲得されるものです。他の子供と一緒に遊んだりすることを通して、「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるころから「人とかかわり」は始まります。それが、「社会性の基礎」を形づくっていくのです。

年少者の課題は、一言で表現するなら、「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることです。そして、年長者になるにつれ、そうしたかかわりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題となります。

出典：『生徒指導支援資料3 「いじめを減らす」』所収の「子供の社会性が育つ『異年齢の交流活動』—活動実施の考え方から教師用活動案まで—」3 ページのコラムより

★ワンポイント・アドバイス★

「褒めること」と「認めること」の違いは？

大人の側に見れば、この両者の違いはあっていないようなものかもしれません。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

育成すべき21世紀型“スキル&倫理観”

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子供には、そんな大人の言い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子供も出てきたりするので。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側がわの基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀まれでしょう。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやししたりしても、子供の「自己有用感」はおろか、「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。

例えば、「ふりかえりシート」を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、ただ「頑張ったね」とだけ書くのではなく、その児童生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見ることが大切です。

引用：文部科学省国立教育政策研究所